



韓国近現代史の核心である
「軍事主義」と、それを体現する
「朴正熙」の満洲時代に迫る、
朝鮮史研究の泰斗による集大成。

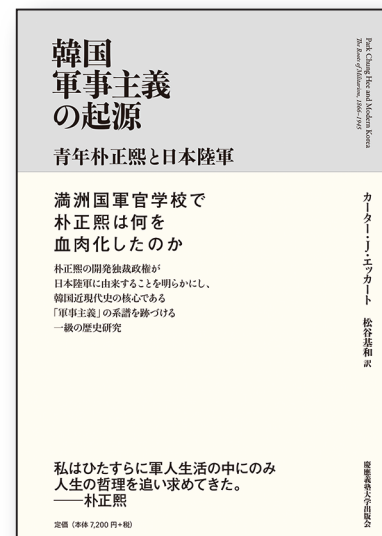
韓国軍事主義の起源 青年朴正熙と日本陸軍

Park Chung Hee and Modern Korea
The Roots of Militarism, 1866-1945
Carter J. Eckert

カーター・J・エックカート

松谷基和 訳

慶應義塾大学出版会



韓国軍事主義の起源

青年朴正熙と日本陸軍

カーター・J・エックカート 著／松谷基和 訳

A5 判上製／512 頁 ISBN978-4-7664-2976-3

定価 7,920円 (本体 7,200円)



▶書籍の詳細はこちら
<https://www.keio-up.co.jp/np/isbn/9784766429763/>

・著者紹介・

カーター・J・エックカート (Carter J. Eckert)

ハーバード大学東アジア言語文明研究科教授。シカゴ生まれ。ハーバード大学で西洋史を学んだ後、1960 年代後半～1970 年代に韓国で平和軍として勤務した経験から、韓国史研究を志す。その後シアトルのワシントン大学で博士号を取得。1985 年以降、ハーバード大学で韓国近現代史を講じ、同大学の韓国学研究所の設立にも尽力した。

・日本刊行に寄せた著者からのメッセージ・

現代韓国史を理解するうえで、朴正熙とその軍事政権がもたらした政治経済的変化は決定的に重要である。しかし、さらに重要なことは朴正熙ら軍人が誕生し、社会で台頭し、政権を握るまでに至った歴史自体が、近現代の朝鮮社会の根源的変化を示す重要な指標であるという点である。本書は「軍事主義」をキーワードに、朴正熙らが育った歴史的背景と彼らが受けた満洲国と日本での士官学校教育の意味を、朝鮮近現代史の視座から問い直す。

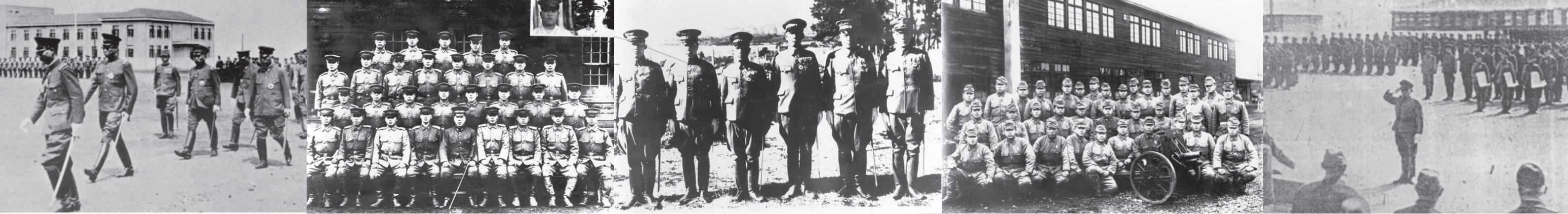
ご購入方法…… 下記お申込書にご記入の上、お近くの書店でご購入ください。

お近くに書店がない場合には、下記の弊社営業部まで直接お申込みください。また、弊社 Web サイトからもお買い求めいただけます。なお、弊社にてご購入いただいた場合、送料は送付先 1 件につき、一律 400 円です。
※1 冊の場合も、複数冊の場合も、送料は変わりません。

お申込書	書店名 ※この欄は書店が使用します。	冊数	発行所：慶應義塾大学出版会 カーター・J・エックカート 著／松谷基和 訳 韓国軍事主義の起源 ——青年朴正熙と日本陸軍 ISBN 978-4-7664-2976-3 定価 7,920 円 (本体 7,200 円)
		お名前：	
		ご住所：	
		電話番号：	E-Mail アドレス：

慶應義塾大学出版会

〒108-8346 東京都港区三田 2-19-30 <http://www.keio-up.co.jp>
お問い合わせ・ご注文は… FAX：03-3451-3122



満洲国軍官学校で朴正熙は何を血肉化したのか。

朴正熙の開発独裁政権が日本陸軍に由来することを明らかにし、韓国近現代史の核心である「軍事主義」の系譜を跡づける一級の歴史研究。

一九六一年から一九七九年までの朴正熙政権期は、韓国にとって未曾有の経済成長を遂げた時代であると同時に、政治的抑圧が激化する時代でもあった。一九六一年に五・一六クーデターで政権を奪取した朴正熙と彼の仲間たちは、近代化を推し進めるにあたって「軍事主義」を取り入れ、開発独裁を敷いた。

本書は、一九世紀後半の朝鮮王朝末期から第二次世界大戦までの時期を精査するなかで、植民地期の満洲国軍官学校の世界へと足を踏み入れ、韓国近現代史の核心へと迫る。若き朴正熙らが、満洲において日本陸軍の文化と行動様式を徹底的に吸収し、その教育と訓練をやがて統治のひな形にしていく過程を明らかにする。

日本語や韓国語の膨大な資料のみならず、韓国人、日本人、中国人の元軍校生たちへのインタビュー調査をもとに、朴正熙が体現する「軍事主義」の起源を探る壮大な試み。

【目次】

まえがき——謝辞と資料について
日本語版へのまえがき

・試し読み・
<https://note.com/keioup/n/866476f7b9a>



序 論

第一部 軍事化の歴史的背景

第一章 軍事化の時代——戦争の波

時間軸／グローバルな連環／朝鮮王朝軍／軍事化の第一波／大院君による初期の軍事化／新しい軍事知識の流入／朝士視察団／一八八〇年代の軍事化——高宗主導の国家改革／一八九四年以後の軍事化／大韓帝国期の軍事化／新軍の創設／軍の拡大と発展——一八九五―一九〇四年

第二章 精神の軍事化——陸軍と民族に関する新思考

兪吉濬（一八五六―一九一四年）／朴泳孝（一八六一―一九三九年）／「武」という価値／朝鮮王朝末期の武徳／併合後への影響と連続性

第三章 場所と人の軍事化——士官学校と生徒たち

軍事化の第二波と植民地朝鮮の学校／士官学校の歴史／軍事化の第二波と士官学校／満洲国軍／中央陸軍訓練処／満洲国軍官学校／満洲国軍官学校の生徒／軍への愛着／ナショナリズムという問い／軍校生活への楽しみ／将校を目指す男、朴正熙／模範的な生徒、朴正熙／熱狂的な生徒、朴正熙

第二部 士官学校の文化と行動様式

第四章 政治と職分——「殊遇」の身分

場所／外観／言語／身体／娑婆からの隔離／軍の枢軸／侍の英雄との絆／明治維新の後継者／戦勝の歴史の後継者／天皇の股肱／象徴的存在としての天皇／物理的な存在としての天皇

第五章 政治と権力——特異な職分

反逆としての明治維新／脆弱な憲法体制／陸軍と世論の反応／朝鮮王朝後期との共通点／1930年代に受け継がれた朝鮮王朝の伝統／満洲事変の遺産／政治的避難所としての満洲／満洲国における軍官学校位置づけ／陸士での根強い昭和維新支持

第六章 国家と社会——革命、改革、統制

前近代の遺産／資本主義に対する批判／革命——マルクス主義と左翼／日本帝国内のマルクス主義と民族的ナショナリズム／軍校での革命活動／士官学校内マルクス主義研究会／満系内の朝鮮人生徒／改革——昭和維新主義者／資本主義の「悲惨なる壊滅」／革命ではなく「革新」／国家の毒としての資本主義／支配ではなく触媒としてのクーデター／一九四〇年代の陸士における昭和維新主義／統制——総力戦イデオロギー／陸軍の教義としての総力戦／総力戦と資本主義／軍官学校における総力戦シナジー／原案——基本計画／団結／総力戦の教育

第七章 戦術と精神——必勝の信念

士官学校における攻撃理論／学校での攻撃教育／攻撃の演習／攻撃の指導教官／田原耕三／「攻撃精神」と意志／士官学校における意志の鍛錬——教室内／学校での意志の鍛錬——教室外／士官学校での意志教育——「ズベル」／学校での意志鍛錬——隊舎内／必勝の信念／戦術と精神を体现する剣道／戦争末期の激烈さ

第八章 秩序と規律——服従の喜び

日常生活の秩序と規則／服従とヒエラルキー／階級間の双務的関係性／規則を支える例外／上部からの監視／内部からの監視／自己検閲／懲罰／学校の伝統としての「殴打」

結 論

軍官学校の終焉／陸軍士官学校の終焉／新たな始まり

注
訳者あとがき

朝鮮人軍校生一覧

参考文献

索引

「私はひたすらに軍人生活の中にのみ
人生の哲理を追い求めてきた。」

——朴正熙

・賛辞・

日本帝国が朝鮮半島と満洲で行った過酷な植民地支配が、いかに権威主義と経済変革の遺産を韓国に残したかについて、著者は驚くべき調査と流暢な文章で魅力的な光を投げかけている。本書は、日本と韓国の近代史を理解するうえで、真に独創的な貢献である。

——ジョン・W・ダワー（『敗北を抱きしめて』著者）

最も著名な韓国史研究者の一人であるエッカートは、朴正熙が献身的な精神、すなわち満洲軍官学校の精神的訓練をどのように身につけ、韓国を近代化に導いたのか、示唆に富む背景を詳しく説明している。

——エズラ・F・ヴォーゲル
（『ジャパンアズナンバーワン』著者）

本書は 1945 年以前の軍事主義の起源について巧みに論じている。その軍事主義は後の朴正熙政権時代の政府綱領、指導方法、開発の哲学、政治戦術において現れることになる。現代韓国史の多くの問題をめぐる議論に大きな影響を与える極めて重要な一冊。

——マイケル・E・ロビンソン
（『韓国の 20 世紀オデッセイ』著者）